

老匠 井上伊兵衛



明治五年、リヨンに渡った織物伝習生のうち井上伊兵衛については、その前後の記録がほとんど残されていない。当時すでに五十歳を越えていたといわれている。

写真で見ると、なるほど他の二人にくらべて頭髮も薄く一番年長であることがわかる。だが、その引締った容貌、鋭い眼付からは、年齢を越えた若さを感じられる。

おそらく伊兵衛は若い二人の引率者としての役割を担っていたと思われるが、それだけではなさそうだ。

西陣物産会社世話役・竹内作兵衛が明治七年五月、府知事・長谷信篤に提出した『紋彫器御組建に付御願』という文書がある。リヨンで購入した紋彫器の組立にあたる佐倉、井上に七円の給料を支払うようお願いしたものである。その文中に「……尤井上は別段勉強も仕候付、相応配分相渡

遣可申候間、何卒右の趣御聞届被成下度奉願上候」というくだりがある。井上伊兵衛は渡欧中そして帰国後も、研究を重ね、機織だけでなく、器械についても、高い見識を持つようになったといたと推測される。そのため西陣物産会社は、伊兵衛に対して、特別の配慮が払われるようお願いしたのである。

このように考えるなら伊兵衛こそきわめて重要な位置にあったということができよう。

五十歳を過ぎてても、なお飽くことない向上心に駆り立てたのは、技術についてのすざましいまでの執念からなのだろうか。佐倉、吉田とはまたちがった意味で創意の人であったというべきである。

伊兵衛は明治八年、佐倉とともに織工場教授人となるが、明治十四年、民営化にもなつて辞任。その後は西陣の名家、井筒屋伊達弥助（第五世）に招かれている。六十歳になろうというのに他家から望まれるということは、よほどの腕利きであったことを裏付けるものであり、機織人として名譽なことだったろう。